



Title	<書評>「生と死の心模様」（大原健士郎著，岩波新書，550円）
Author(s)	大塩，幸子
Citation	大阪公衆衛生. 1991, 60, p. 18-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83616
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『生と死の心模様』

大原健士郎著（岩波新書 550円）

こんにちは皆さん。いそがしい毎日を過ごしていませんか。私は、日々多忙なる保健所業務におわれて心身ともに疲れ、ある時知らないあいだに心が貧しくなっているのに気づきました。

そんなとき書店でこの本を見つけ、開いてみました。精神科医によってかかれた本で、めは難しいかなと思いつつ、読んでいるうちにいつの間にか本に吸い込まれてしまった、という感じがしました。

内容は、「死と精神医療」、「現代人の心の風景」、「自殺者との対話」、「現代医療に揺れる心」、「がん告知」、「森田療法」など、実にわかりやすく、またやさしく書かれてあります。

なかでも「自殺者との対話」では、自殺者の心理状態の特徴は、第1に「死にたい」という反面「助けられたい」と願っていること、第2に、自殺は心理学的に流行するということ、第3に、「孤独」であるということ、第4に、自殺はちょっとした心のすきまから生じることなど、自殺をする場所や心などがよくつかまれて書かれています。

現代は、いかにストレスとじょうずにつきあっていくかということを、よく耳にします。お金さえだせば何でも手にはいる生活を送っているようですが、反面、人々の心はきっと孤独なんでしょう。寂しい思いがします。

この本を読んだからといってストレスが解消する訳ではありませんが、心を忘れかけて生きている現在「心こそ 心こそ 死ぬことのない命なの」で始まるこの本をお勧めします。

（東大阪市東保健所 大塩幸子）